大学編㊷ 最新事情

自立した女性としての生き方・働き方を考え、資格と技能を磨く

神戸女子短期大学

（兵庫県神戸市）

神戸空港からほど近く、ポートアイランドの中央に位置する神戸女子短期大学。総合生活学科・食物栄養学科・幼児教育学科の3学科からなる同短大では、約550名の学生が実践力を伸ばすため、日々学んでいる。同短大での秘書検定の取り組みと、就業意識育成のための科目について伺った。

ポートアイランドにある神戸女子短期大学

授業の中で、幅広く技能と資格を身に付けさせる

神戸女子短期大学は昭和25年の開学以来、社会で能力を発揮できる自立心・対話力・創造性を持った女性を育てることを教育の目標としてきた。現在は、衣食住・ビジネス・情報などの10分野の科目群からなる総合生活学科、栄養士や栄養教諭を養成する食物栄養学科、幼稚園教諭や保育士を養成する幼児教育学科で、それぞれの分野における実践力の育成を行っている。

総合生活学科は他の2学科と異なり、目指せる業種・職種が幅広く、学ぶ内容を、学生個々が自身の興味に合わせて選択できる。授業を通して取得あるいは受験資格を得られる資格も、フードコーディネーター3級やブライダルプランナーなどさまざま。その中でも、「あらゆる職業において汎用性がある内容」として多くの学生に受験を勧めているのが秘書検定だと、総合生活学科の中川伸子教授は話す。

「秘書検定は、入学後すぐに始まる『秘書ビジネス論』で案内し、6月の試験で3級もしくは2級を受験させています。科目自体は検定対策ではなく秘書ビジネス全般についての概論ですが、6月の試験まであまり期間がないため、秘書検定に出題される内容が出てきたら青で板書し、学生に意識を向けさせています。また、例えば試験直前の講義では、学生になじみの薄い『ビジネスにおける慶弔』を取り上げるなど、秘書検定を意識した順番で内容を指導しています。そうすると、記憶が新しいまま試験に臨めるので、しっかり解答できるようです」。

この時期はまだ学生が90分の講義に慣れていないこともあり、30分ずつ3分割して内容に変化をつけているそうだ。まずテキストに沿って解説した後、次の30分で秘書検定の過去問題を解かせて解説。最後の30分では、企業における実務の様子が分かる映像を見せたり実技を取り入れたり、視覚的に理解できるよう工夫している。

後期には演習を中心とした「秘書実務」で、「秘書ビジネス論」と秘書検定を通じて知った実務が〝できる〟ように指導する。電話応対や

中川先生とともに「キャリアへのアプローチ」を指導する，総合生活学科の福井愛美教授と，食物栄養学科の上野和廣教授。インターンシップの指導も担当している

副学長でもある，総合生活学科の中川伸子教授

受付での応対、案内、お茶出しなど、実際に言葉を発し動いてみることで、秘書検定の設問や選択肢の状況がより深く理解できるようになるという。

「最初は『難しい』『会社の中のことなんて知らない』と言っていた学生たちも、早い時期に3級に合格することで自信がつき、『次もできそう』『上の級に合格したい』と、意欲が湧いてくるようです」と中川先生。11月には2級、そこで駄目でも学内のエクステンション講座を利用して、1年生のうちに2級に合格するのが目標だ。準1級を目指す学生には、授業外の時間を利用して、中川先生が個別に面接の指導をしている。

1年後期科目「秘書実務」では秘書検定の内容にも触れながら，来客応対や電話応対などを実践的に学ぶ。「実際に体験してみることで，設問や選択肢の状況をより具体的に理解できます」（中川先生）

総合生活学科2年生の伊原きらりさんは秘書検定2級と準1級に合格。「卒業までに1級に合格するのが目標。6月と11月，2回チャンスがあるので頑張ります！」

総合生活学科2年生の伊原きらりさんは、1年生の6月に秘書検定2級、11月には準1級を受験し、合格した。筆記試験自体は、授業と、空き時間に何度も過去問題を解くことでクリアできたが、難しかったのは面接だ。

「特に状況対応が難しくて、最初は不安でした。何度か練習して分かったのは、長時間考え込まない方がよいということ。状況設定のボードを提示されたら、反射的に対応できるくらいになろうと、中川先生に繰り返し指導していただきました」（伊原さん）。

飲食店と新幹線の車内販売のアルバイトをしているが、検定で学んだお辞儀や言葉遣い、人と接するときの礼儀などがそのまま生かせている。「入学当初は自分に自信がなかった」という伊原さんだが、今は、「マナーは他の人よりできるという自信がつきました」と笑顔で話してくれた。

卒業後の人生を考えさせる「キャリアへのアプローチ」

同短大では社会で働く女性を育成してきたが、数年前から教養科目群の中で開講している「キャリアへのアプローチ」はまさに、卒業後の人生のために学生時代に何を学び準備するかを考えさせる科目である。

「これから先は誰もが一生働く時代になっていきますが、学生は高校を出たばかりで、そのことにまだピンときていません。女性として、社会人として、何を考えどう準備していくのか。これを早いうちに意識し、2年しかない短大の学生生活でよく考えてもらいたいと思っています」（中川先生）。

入学直後から始まる「キャリアへのアプローチⅠ」は、総合生活学科と食物栄養学科の選択科目だが、両学科の学生ほぼ全員（約180名）が受講する。全15回で、「キャリアデザイン」とは何か、社会人基礎力と表現力の重要性、社会人の義務である税金や社会保険、女性として知っておきたい労務の知識、企業や就業についての理解、自己分析などを学ぶ。内容によっては外部から講師なども招いている。

後期に開講する「キャリアへのアプローチⅡ」は、卒業後の就職活動により直結する演習で構成されている。先輩の体験談や就職面接で問われるマナーやコミュニケーション力、エントリーシートやメール・礼状の書き方、企業研究の他、グループディスカッションや面接の練習などを取り入れており、タイミングを逃さず就職活動に入っていけるよう、後押ししている。2年生の伊原さんも昨年度に「キャリアへ

最新事情㊷……神戸女子短期大学

1年生後期には「キャリアへのアプローチⅡ」を開講。こちらは目の前に迫った就職活動のために面接やディスカッションの練習，自己分析や書類の書き方などを学ぶ

のアプローチⅠ・Ⅱ」を受講。

「エントリーシートなどは、一人だと悩んでいるうちに出遅れてしまいそうだったのですが、皆で一緒に取り組むことでスムーズに就職活動への意識づくりができました。何より、皆が頑張っている、私一人じゃないんだと分かるので心強かったです」（伊原さん）。

今年度も大教室いっぱいに新入生が並ぶ。1年後の就職活動、2年後から始まる社会人生活に向けて、緊張の面持ちで先生方の声に耳を傾けていた。

地元企業での実習で大人に一歩近づく学生たち

実践力という意味では、インターンシップも欠かせない取り組みだ。以前から企業での実習を行ってきたが、単位化したのは平成28年度から。食物栄養学科・幼児教育学科ではもともと現場実習が必須であるため、インターンシップには総合生活学科と食物栄養学科で一般企業への就職を希望する学生が参加するという。

総合生活学科の福井愛美教授は取り組みについてこう説明する。

「インターンシップは、1年生の夏休み中に行います。実習先は、兵庫県経営者協会や姫路市経営者協会の加盟企業と短大のキャリアサポートセンターが開拓してくれた企業約160社から選択。必ず希望した企業・職種に行けるわけではありませんが、学内での事前指導、各経営者協会での事前指導を経て実習に取り組みます」。

特にそれぞれの経営者協会の加盟企業でのインターンシップでは、事前指導から他大学の学生と一緒になるため、学生は緊張感を持って参加するそうだ。実習期間は多くが4、5日。長ければ10日前後になる実習先もあるという。

インターンシップに参加する学生は先生方から見て、どのような印象だろうか。食物栄養学科の上野和廣教授は次のように話す。

「入学直後のオリエンテーションで、学生生活は2年しかないため、自分でよく考えて活動するよう伝えています。そのため、インターンシップに参加を希望する学生は、非常に意欲的。早めに社会のことを知りたいと、積極的な姿勢がうかがえます」。

インターンシップを経ての変化は非常に大きいと先生方は言う。

「物の見方が大人になりますね。実習後には事後指導として活動報告をさせるのですが、きちんとまとめて話せるだけでなく、その内容もしっかりしています。例えばインターンシップ先で〝500円のヘルシー弁当を作り、どうやったら売れるか考える〟という課題を出され、企画を考え発表したという学生もいました。一人の社会人として扱ってもらえて、その期待に応えるという経験が学生を成長させるのでしょう」（上野先生）。

「何より、アルバイトでは分からない、企業の奥のことまで見せていただけるのがありがたいですね。インターンシップに参加した学生は、その後の就職活動にもスムーズに移行することができるようです」（福井先生）。

就職活動が始まるまでの1年をどう過ごすか。短い学生生活だからこそ、学内・学外での活動をフルに活用することが、成長のカギとなるようだ。

総合生活学科・食物栄養学科1年生前期の「キャリアへのアプローチⅠ」，外部からも講演者や講師を招き，職業や社会人としての生活，税金など幅広く学ぶ。選択科目ながら両学科の9割以上が受講する